

問答形式による、「最終版」作成に向けての重要論点整理

⑩ 最後に、「二つの倭国」と「倭の五王」の関係(事実?)をどのように解き明かせばよいか?!

- I: ということですが、一応、この『最終版』作成に向けての重要論点整理も、この辺りで終わっておきたいと思うのですが、いかがですか?
- D: そうですね! あまり長くやるのも、これまでと同じ轍を踏む可能性もありますので、そして、ある意味切の良いところだとも思われますので、そうすることにしましょう!
- I: そこで、ここでは、これまでのこととか、何か補足とか、修正とか、そういったことはないですか?
- D: まあ、補足とか、修正とかといったことではないのですが、私の論考(言いたいこと)は、「邪馬台国所在地論争」や、それに関わる「九州王朝説対近畿大和王朝説」のような、言わば「二者択一的論争」では、真の我が国の建国史(古代史)は描けないのではないかということで、どのような視点・アプローチが必要なのか? そうした観点(スタンス)で、微力、そして、かなり恣意的? かもしれませんが、私なりの考察を進めているということです! 単純に言えば、知れば知るほど、よく分からなくなる? だから、本当のことは、まだ明確にはなっていない? そんな思い(感触?)があるのです!
- I: いわゆる多くの「通説」「定説」が、実のところは、誰もが納得できる史実(真実)とは言えない? そういうことですね?
- D: 素人の身で、そういうことを言うのは、かなり烏滸がましいのですが、まさに、そういうことなのです!
- I: 私としては、そんなDさんの思いも分かりますし、これまで書かれてきていることも、一応、私なりに理解できるものではありましたよ! とにかく、最終的には、「二つの倭国」と「倭の五王」の関係(事実?)が、もう少し説得力のある解明となれば、それこそ、かなりの真実に近づけるような気がしますよ!
- D: そうですか! それは、有難いですね! 要は、それが、「百濟」あるいは「百濟系」だけの話なのか? それとも、「伽耶・新羅系」の関わりがあつての話なのか? まさしく、そこが大きなポイントとなると考えているわけですが、ただ現在、そこではっきりしていることは、その大きなポイントの中心にいるのが、「応神」であり、それを取巻く「神功皇后」であり、「武内宿禰」であり、「住吉大神」であるということです?! だから、そこら辺りを、改めて精緻に(総合的に)捉えていく、そうした努力を重ねようとしている次第なのです!
- I: その際、余計なことかもしれませんが、そこでは、かの有名な「仁徳」とか、「雄略」とかいうような天皇? は、どのようになるのでしょうか? 多くの人の、現時点での解釈(通説?)では、彼らは実在の天皇で、まことに重要で、偉大な人物(勢力)のようにも受け取られていますよね?
- D: 確かにね! しかし、多分? 彼ら自体は創作上の人物でしょう?! とは言え、重要なことは、必ずそのモデルとなった人物(勢力)はいたはずですし、そこに、どういう意味を持たせているかだと思います! 例えば、例の「聖徳太子」のような人物(蘇我馬子 or 入鹿?)も、そういうからくり? であつた?! とにかく、すべてを鵜呑みにしたり、すべてを否定したりすることは、史実の? 解明を見誤るということになるということです!
- I: 確かにそうですが、そうであれば、敢えて言うのですが、Dさんの、ここでのテーマ(仮説?)も、そうした誤謬? に陥っているということはありませんか?
- D: 残念ながら、そういうことも、実は多々あるのでしょうか?! しかし、私が最もポイントだと考えている、この「二つの倭国」と「倭の五王」の関係(事実?)は、単なる私の思い込み(入れ?)ではなく、中国史書『宋書』『(旧)唐書』にも示されている事実であり、そこに多少の誤認・逸脱等があつたとしても、それ自体は信用されるものであるということに立脚していることは、ここでも強く主張しておきたいと思えます!
- I: 分かりました! そこで、最後になりますが、何故? Dさんは、このような我が国の建国史(古代史)に関心を寄せているのでしょうか? その辺が、長年付き合ってきている私にしてみれば、不思議というか、もっと他のことに、エネルギーや時間(余生?)を費やさなければいけないのではないかと?
- D: そのことは、奥さんにもよく言われますが、結局は、仕方がありませんね! 端的に、そう思うのですが、強いて言えば、本当はどうだったのか? そこを、自分の目(力?)で確かめたい、そういうことでしょうかねえ?!
- I: まあ、そこまで言われるのであれば、これからも、そのスタンス(執念?)で頑張ってもらう他ありませんね! 私が言うのも変なことですが、折角Dさんが、最後(期?)の仕事?として、目の疲れや足腰の衰えも顧みず、しかも、ほとんど誰からも評価されなくても、やっていかれていることに拍手を送りたいと同時に、少しでも、その成果?が、私達日本人の、自国の歴史(ルーツや特性等)の解明に役立てば、これほど喜ばしいことはありません! たとえそこに、本当は?、あまり認めたくはない史実があつてもですが?!
- D: そう言ってもらえれば、誠に嬉しいですね! しかし、そのこと自体は、私にとっては、あまりこだわるものではありません! ある意味、自然の成り行きであり、まさに私の趣味・道楽?でもあるからです!